

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00536

研究課題名（和文）音調中和過程の地域的多様性・特異性と新たな標準化の成立機序

研究課題名（英文）Regional diversity and uniqueness in the tonal neutralization process and mechanism for establishing new standards of accentual patterns

研究代表者

那須 昭夫 (Nasu, Akio)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00294174

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：現在の共通語では、用言を中心に音調の中和が生じつつある。この中和の様態は話者の生育地域により多様な実態を示す。本研究では音声コーパス所収のデータを分析することで、次の地域的多様性を明らかにした。(1)首都圏出身者の発話では語長が増すにつれて中和頻度が高まる性質がある。(2)関東周辺出身者の共通語は中和に対して保守的な傾向が強いが、首都圏同様の語長感受性が観察される。(3)無アクセント地域出身者の中和動態には語長感受性が見られない。(4)西日本地域出身者の共通語では中和の頻度が著しく高い。(5)京阪神地域出身者は共通語を運用する際にも母方言の規則を参照し、それが中和の様態に影響を与えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として特筆できるのは、現在進行中の音調中和現象を捕捉し、その実態に見られる地域的差異を記述し得たことである。従来のアクセント研究では首都圏在住者の言語のみを暗黙裡に共通語とみなしてきたが、本研究では各地で運用される共通語にまで観察を拡大し、中和をめぐる地域的多様性の現状を逸することなく捉えた。変わりゆく日本語の実態や地域的な多様性を捕捉することは言語学の成果として貴重であるとともに、母語である日本語の現状に対する人々の認識の深化にも貢献し得る点で、その社会的意義も大きい。変異の最中にある現象の実態を捉えることで、より実像に近い日本語の姿に迫れたことが本研究の意義である。

研究成果の概要（英文）：In Standard Japanese, tonal neutralization occurs mainly in verb phrases, where the tonal contrast merges into only an accented pattern. How this neutralization occurs varies depending on the region where the speaker grew up. This study analyzes data from CSJ and illustrates the following regional diversity. Speakers from the metropolitan area exhibit a tendency where the more word lengths increase, the more frequent the neutralization becomes. Those from Kanto region show a conservative inclination towards neutralization but have verb length sensitivity identical to those from the metropolitan area. There is no word-length sensitivity in the neutralization dynamics of those from unaccented regions. The frequency of neutralization is significantly higher in the Standard Japanese spoken by those from Western Japan. Those from the Keihanshin refer to the rules of their mother dialect even when speaking Standard Japanese, and this has characteristic effects on the state of neutralization.

研究分野：言語学・音韻論

キーワード：アクセント 中和 式保存型形態素 標準語 共通語 地域差

1. 研究開始当初の背景

現代日本語のアクセント変化をめぐる従来の研究では、東京を中心とする首都圏地域の言葉が暗黙裡に「共通語」として位置づけられ、その変化動態に関する記述が積み重ねられてきた。一方で、首都圏以外の地域の居住者・生育者が運用する共通語のアクセントおよびそこに生じる変化については、これまでほとんど研究が及ばないまま等閑視されてきた。たしかに首都圏は共通語話者の集住地ではあるが、首都圏以外の地域でも共通語の運用がもはや日常化しているという実態を見逃すべきではない。加えて、そうした地域で運用される共通語でのアクセント変化の動態が首都圏におけるそれと全く同じ様相を示すという保証もない。

このような状況の中で、同じ共通語であっても話者の出身地域・生育地域の違いによりアクセント変化の遅速や特性が異なっている可能性があることを示唆する事実が見いだされてきた。「ながら・たい・そうだ」などの式保存型付属語に平板動詞が前接した形式でのアクセント変化がそれである。この種の形式では本来(1)のように節全体も平板型のアクセントをとるが、近年では(2)のように節全体が起伏化する変異が生じ始めている。

- (1) 笑い-ながら=、笑い-たい=、笑い-そうだ=
(2) 笑い-な]がら、笑い-た]い、笑い-そ]うだ

この現象をめぐる那須(2019)は「平板動詞+そうだ」からなる節の音調を分析し、起伏化の生じる頻度が話者の出身地域により異なるとの萌芽的知見を得た。この事実は、「首都圏に生じた新たな変化が周辺地域に波及する」といった従来型の素朴な観察が上述の現象に関しては通用しないことを示唆して余りある。むしろ、それぞれの地域において運用される共通語にはそれぞれ固有の特性があり、それがアクセント変化のあり方にも投影されている可能性が高い。

本研究では上述の萌芽的知見を踏まえ、共通語を運用する話者の出身・生育地域の違いに着目し、共通語に生じつつあるアクセント変化にいかなる地域的多様性が見いだされるか、その実態の解明に取り組むことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的のひとつは、式保存型形態素を含む節や派生語に生じつつあるアクセント変化の実態としくみを明らかにすることである。(2)のアクセント変化が生じると、動詞語幹の音調を継承する形で「平板型：起伏型」の二型対立をなしていた音調体系(3a)が起伏一型(3b)に中和してしまうことになる。

- (3) a. 在来の体系(対立あり) b. 新たな体系(中和)
 笑う= ワライ-ナガラ= 笑う= ワライ-ナ]ガラ
 怒]る オコリ-ナ]ガラ 怒]る オコリ-ナ]ガラ

本研究ではまず、この音調中和を促進/抑制する要因を言語内の観点から明らかにすることを目指した。

加えて、本研究の最も大きな目的は、音調中和のあり方にいかなる地域的差異が生じているか、その実態を明らかにすることである。首都圏の共通語とその他の地域の共通語とで、中和を指向するアクセント変化が全く同じ動態を以て起こっているとは考えにくい。中和の生起頻度をはじめとする各種の特性には、話者の出身・生育地域の言語的特徴が反映されていることが予測される。この予測に基づいて、本研究では各地域で運用される共通語におけるアクセント変化の特性の記述および地域的多様性の実態の解明を目指した。

3. 研究の方法

本研究の開始当初は臨地調査を実施して音調中和の事実を含む音声データを収集する計画であった。しかし、COVID-19 パンデミックの発生により対面調査が実施できなくなったため、自発発話音声コーパス(『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』)を活用したデータの収集・分析へと研究手法を転換することにした。

CSJを用いたのは、このコーパスが標準語を志向した発話を収集する方針の下で構築されたものであること(前川 2004)による。また、本研究ではCSJのコアデータに加え、非コア部分のデータも分析対象とした。非コア部分には東京・首都圏以外の地域で出生した話者の発話も含まれているため、アクセント変異の地域差を検討するに際して好適な分析対象となるからである。

分析対象とするデータの抽出は次の手順で行った。まずCSJ収録のXMLファイルを用いてターゲットの言語形式を検索し、その結果をもとに転記基本単位レベルで事例を抽出した。次に、音声認識システムJuliusを用いて、抽出した事例に対応する音声データの切り出しと音素セグメンテーションを行ない、そのデータに基づいて音声分析ソフトPraatで利用可能なTextGridファイルを作成した。上述の手続きで得られた音声データをPraat上で悉皆聴取し、アクセント

の記述を行った。記述は「0(平板型)/1(起伏型)」の二項値からなる符号により行い、それらを入力したデータセットを表計算ソフト上で作成し、これに基づいて起伏化率をはじめとする各種の数値データを抽出し定量分析を行った。その結果を得た上で、中和の機序ならびに地域的多様性に関する記述的・理論的な考察を行った。

4. 研究成果

(1) 地域的多様性の実態(平板ナガラ節での音調中和)

平板動詞に助詞ナガラが付属した用言形式(例:笑いながら)での音調中和(起伏化)の実態を分析し、その地域的差異について以下の知見を得た。首都圏話者での中和率は53.1%であったが、これを基準に見ると、関東周辺地域話者および京阪神地域話者の中和率は首都圏話者のそれを大きく下回る。反対に、西日本中輪東京式地域話者の中和率は極めて高いのが特徴である。なお、無アクセント地域話者の中和率は首都圏のそれと同程度であったが、この点については後述の回帰モデルによる分析結果(図2)を考慮する必要がある。

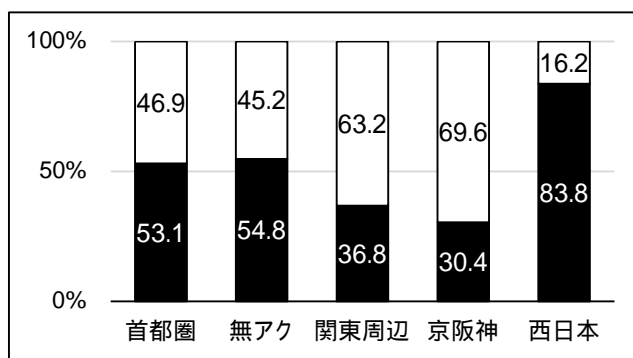


図1. 地域別の中和率 (中和・非中和)

このデータについて、中和率(起伏化率)を被説明変数・前接動詞の拍数と地域を説明変数とするロジスティック回帰モデルを構築してさらに精査した。その結果は次とおりであった。

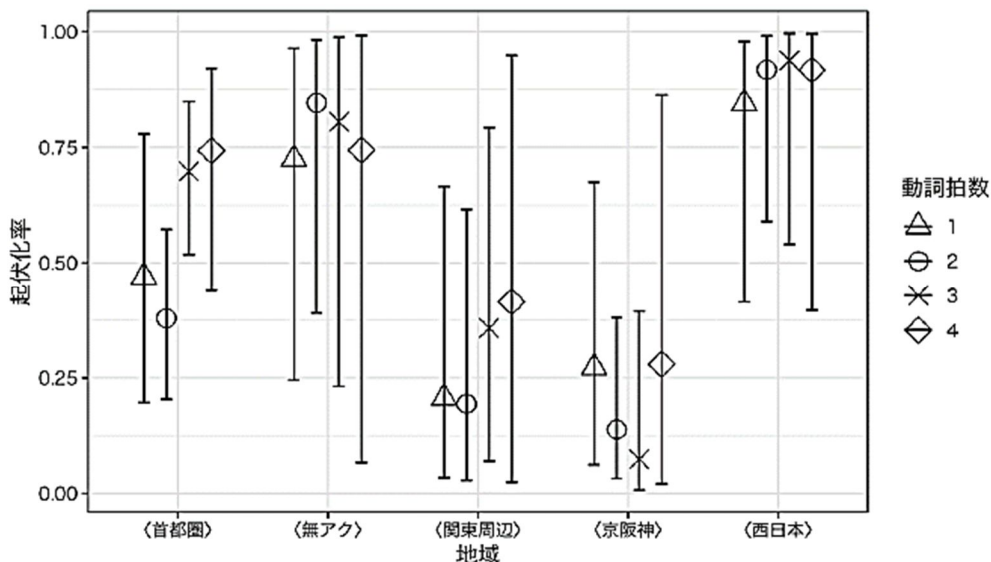


図2. 回帰モデルによる予測結果(左から首都圏・無アク・関東周辺・京阪神・西日本)

首都圏ではナガラに前接する平板動詞の拍数と中和率との間に次のような相関が認められた。すなわち、前接動詞が短い形式(1・2拍)に比べて長い形式(3・4拍)の方が中和率が高い。こうした語長感受性は首都圏話者の中和機序を特徴づける注目すべき特性である。

これに対して、中和率では首都圏と近似していた無アクセント地域話者では語長感受性が見られない。また、回帰モデルでは話者の個体差をランダム効果として吸収しているため、素朴な集計(図1)では捉えきれなかった特徴として、無アクセント地域話者では中和率が首都圏話者に比べて高値を示す実態があることが新たに明らかになった。

関東周辺話者は中和率が低値に留まるのが特徴である。しかしながら、首都圏話者と同様に語長感受性が見られることが注目すべき事実として特筆できる。すなわち、中和に対して保守的な性格を含みながらも、前接動詞の語長が中和率のあり方に反映される点で、中和をもたらす文法

の設計自体は首都圏話者のそれと基本的に同様であることが分かる。

京阪神話者は関東周辺話者と同様に中和率の低い群であるが、語長感受性が見られない点が特徴である。これには、ナガラ節を常に無核で生成するという近畿方言の文法の影響が関与していると推察される。

西日本地域の話者は中和率が極めて高く、中和に対して先取的な特徴を示している。ただし、語長感受性は明瞭でない。この点は、同じ中輪東京式アクセントの分布地域であっても、首都圏および関東周辺とは中和機序に性格の異なる部分があることを示唆する。

(2) 母方言アクセント体系の影響 (接尾辞「-方」のアクセント形成)

「遊び方・作り方」のような派生名詞を作る接尾辞「-方」も式保存型形態素の一種であり、平板動詞に結合した形式は平板型で、起伏動詞に結合した形式は起伏型で現れるが、やはり中和に向かう変異を生じている。ただし、この形式では起伏化による中和に加えて平板型に向かう中和(4)も見られるのが特徴である。

(4) 作]る ツクリ-カ]タ ツクリ-カタ=

「作る」は起伏動詞であるのでこれに「-方」がついた形式も起伏型になるのが規則的なあり方だが、自発発話音声では「ツクリ-カタ=」のような平板型のゆれも確認される。

そこでCSJを活用して「起伏動詞+方」からなる派生語の音調変異の実態を分析したところ、東京出身者と京阪神出身者との間には明瞭な違いがあることが明らかになった。すなわち、東京出身者では平板化に向かう中和が2割弱(17.6%)しか生じていないのに対し、京阪神出身者ではそれが5割以上(54.8%)を占める。共通語アクセントでは「起伏動詞+方」の平板化は原則として起こらないが、これが京阪神話者において突出した高頻度で生じるのは注目すべき結果である。

この実態の背景には、京阪神話者の母語である近畿方言のアクセント体系が関与している。「-方」は共通語では式保存型形態素として働くが、近畿方言では平板化形態素として働く。また、動詞のアクセントにも違いがある。共通語の動詞には下げ核の有無による二型対立があるが、近畿方言の動詞の連用形語基は多くの形式で無核であり、下げ核の有無は対立に寄与しない。すなわち近畿方言の「動詞+方」は常に無核でしか起こらず、起伏型の生成に結びつく要因は一切存在しない。こうした近畿方言に特有の文法が参照された結果、「起伏動詞+方」が平板型で現れる発話が多くを占めるに至ったと結論づけられる。

この知見は、共通語の地域的変種の性格を考えるうえで示唆的である。共通語とは異なるアクセント体系を母方言に持つ話者は、共通語を志向した発話を行う際にも母方言の文法を参照することがある。ただし、母方言の文法だけを常に参照しているわけではないという点には注意が必要である。京阪神話者が共通語の文法も運用していることは、京阪神話者が「起伏動詞+方」を(方言的な)平板型で実現する確率が半数程度に留まることから明らかである。

(3) OCP 感受性の影響 (サ変ナガラ節のアクセント変化)

式保存型形態素を含む節での音調中和は、先行する文節の音調による影響を受けるとの予測がある(那須・栗木 2015)。このことを、サ変動詞を含むナガラ節(サ変ナガラ節)での中和率を検討することによって実証した。ナガラ節の中には、漢語サ変動詞の連用形がナガラに前接する形式がある。これには漢語部分のアクセントが平板式である形式(5)と起伏式である形式(6)とがある。

(5) 比較しながら ヒカク= + シナガラ

(6) 理解しながら リ]カイ + シナガラ

サ変動詞は平板動詞の一員であるので、理論上サ変ナガラ節も平板型で実現されるはずである。しかしながら、実際には(5)(6)のいずれにおいても起伏型に変異した中和音調(例:ヒカク-シナ]ガラ、リ]カイ-シナ]ガラ)が生じることがある。ただし、起伏化(中和)の発生頻度には違いが認められ、平板動詞前接形式(5)のほうが起伏動詞前接形式(6)に比べて有意に起伏化を起こしやすいことがCSJの発話データの分析から明らかになった。起伏化率(中和率)は前者が60.9%であるのに対して後者は40.9%であった。

その背景について本研究では韻律音韻論に基づく考察を行った。平板動詞先行形式ではナガラ節に起伏化が生じても全体の下げ核は1つだけであるが、一方で起伏動詞先行形式において起伏化が生じると、結果的にナガラ節全体に2つの下げ核がもたらされることになる。この構造的特質を換言すると、同一アクセント句内において有核素性[Acc]が隣接した状態ということができる(図3)。

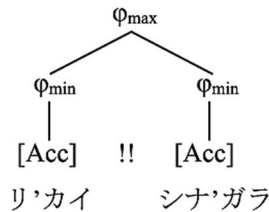


図 3. 起伏動詞前接形式(6)でナガラ節の起伏化が生じた構造(OCP 制約違反構造)

ある音韻領域において同一の素性が隣接する構造は通言語的に回避されやすいことが知られているが(OCP 効果)起伏動詞前接形式(6)において相対的に起伏化率(中和率)が抑制されるのは、起伏化が生じることによってこの制約に抵触する構造(図3)がもたらされてしまうからだとして分析できる。このように、本研究ではサ変ナガラ節での音調中和の成否に OCP 感受性が作用していることを実証と理論の両面から明らかにした。

(4) 総括

以上、本研究では CSJ 所収の自発発話音声の分析を通じて、共通語アクセントに生じつつある音調中和現象の実態を明らかにした。本研究が明らかにした主な知見は次のとおりである。

- 首都圏話者には中和に際して語長感受性が明瞭に認められること。
- 関東周辺地域話者は中和に対して保守的な傾向を見せるが、語長感受性を示す点において中和の機序自体は首都圏話者のそれと同様の特性を共有していること。
- 無アクセント地域話者は中和を起こしやすいが、語長感受性は示さないこと。
- 西日本中輪東京式地域話者における中和率は極めて高く、中和に対して先取的な文法状態にあること。
- 京阪神地域話者は共通語の文法と併せて母方言の文法も参照していると見られ、それが中和の成否や様態に影響を及ぼしていること。
- 式保存型形態素を含む形式での音調中和過程には OCP 感受性が見いだされること。

本研究の最大の成果は、音調中和現象の実態分析を通じて共通語アクセントの多様な現状を記述し得たことである。加えて、中和を促進/抑制する音韻的要因として、語長感受性ならびに OCP 感受性の作用を見出した。このうち特に前者に関しては、共通語アクセントの地域的多様性を記述する際の重要なファクターであることが明らかになった。

なお、既述のとおり、本研究では当初臨地調査を通じて音声資料を収集する計画であったが、COVID-19 パンデミックの影響により自発発話音声コーパスからデータを収集することとなった。無論、CSJ を活用した分析からも上述のとおり十分に有意義な知見が得られたが、一方で CSJ 所収の自発発話音声は 2024 年現在から見て 20 年ほど前に収録されたものである点には留意を要する。共通日本語音声の現状をさらに精密に捕捉するには、臨地調査等を通じて現時点でのアクセントの変化の動向を同時代的に追跡していく必要がある。

<引用文献>

- 那須昭夫(2019)「ソウダ節での音調中和にかかわる構造的・地域的要因」『日本語学会 2019 年度秋季大会予稿集』137-144.
- 那須昭夫・栗木風香(2015)「若年話者に生じつつある付属語アクセントの変化 - ナガラ節での起伏化傾向 - 」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』128-133.
- 前川喜久雄(2004)「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15, 111-133.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 那須 昭夫、今田 水穂、文 昶允、田川 拓海	4. 巻 26
2. 論文標題 接尾辞「-方」を含む派生名詞でのアクセント変異 平板化率にみる地域差と母方言からの干渉	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 1~12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24467/onseikenkyu.26.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Nasu Akio	4. 巻 25
2. 論文標題 Neutralization and paradigm simplification : Recent accentual variation in the cardinal numerals	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Phonological Studies	6. 最初と最後の頁 33~38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 那須昭夫	4. 巻 -
2. 論文標題 式保存型接尾辞「-方」の音調形成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 プロソディー研究の新展開	6. 最初と最後の頁 1~20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 那須 昭夫、今田 水穂、菅野 倫匡	4. 巻 27
2. 論文標題 平板ナガラ節の起伏化にみる共通語アクセントの変異と地域的多様性 『日本語話し言葉コーパス』所収 発話の分析	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 77~91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24467/onseikenkyu.27.3_77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 那須昭夫	4. 巻 27
2. 論文標題 サ変ナガラ節での音調句の構成と音調中和現象	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音韻研究	6. 最初と最後の頁 51～60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 那須昭夫・今田水穂・菅野倫匡
2. 発表標題 平板ナガラ節の起伏化に見る地域的多様性
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 那須昭夫・今田水穂・文昶允・田川拓海
2. 発表標題 接尾辞「-方」の音調変異にみる語長と母方言の影響
3. 学会等名 第16回音韻論フェスタ
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------